

2025 年度答志島合宿 調査研究成果書

22 世紀奈佐の浜プロジェクト 学生部会

1. 目的

伊勢湾には年間 12,000 トンのゴミが流入し、そのうち約 4 分の 1 が鳥羽市答志島の奈佐の浜に流れつく。答志島の手苔養殖においてゴミが手苔網に絡まり損壊するなどの被害が出ており、鳥羽市の産業にも影響を及ぼしている。漂着ゴミは都市や山間部を含む流域全体を発生源とし、廃棄物管理や人工林の放置といった問題とも関連している。

ところがこうした実態は、島外の人々には十分に伝わっているとはいえない。漂着ゴミ問題を解決するためには、自分たちが出したゴミが川を通じて海へ流れ着き、問題を引き起こしているかもしれないということを、上・中流域の人々にも共有する必要がある。また、川を通じて海に流れ着くのはゴミだけではない。山・川・海はつながっており、そのつながりがもたらす恵みによって私たち人間の産業や文化、生活は維持されてきた。

そのため、伊勢湾流域に住む愛知・岐阜・三重の大学生を中心に奈佐の浜の現状を体感してもらう、また山・川・海それぞれで活動する参加者が交流し、流域の連携を深めることを目的に本合宿を実施した。

2. 概要

令和 7 年 10 月 11 日から 10 月 12 日の 2 日間にわたり活動を実施した。三重大学、信州大学、岐阜大学、四日市大学、愛知学院大学、金沢大学の学生 18 名とその他社会人等 28 名が参加した。

一日目は午前中に答志島・桃取へ移動し、午後は釣りや散策などを通して答志島への理解を深める時間とした。二日目は午前中に奈佐の浜で清掃活動を行い、午後からは学生交流会を実施した。学生交流会では、清掃活動での体験を踏まえゴミ問題に留まらない流域のつながりと、課題への対策について話し合った。

3. 内容・成果

・ 答志島を知る・体験する

釣りや散策を通じて答志島の海の豊かさや島独自の文化を感じることができた。また、アマモ場再生に関する地元住民との意見交換を通じて、地域が海の環境を保全するために継続的な取り組みを行っていることを知り、その重要性を認識した。

・ 海岸清掃

22 世紀奈佐の浜プロジェクト主催の清掃活動に参加し、答志島の豊かさの裏に多

くの海洋ゴミが漂着していること、そしてその深刻さを知ることができた。

・学生交流会

班に分かれてテーマについて意見を出し合い、発表をしてもらった。

テーマとその意見を下記のとおり。

- 1 伊勢湾の流域マップの作製
- 2 流域マップ内で自分が住んでいる場所を示す
- 3 午前中(海岸清掃)に拾ったごみはどこから来たか
 - ・都市部、山林、河川、海岸
- 4 ゴミ以外に何が川を流れているか、またどのような影響が考えられるか
 - ・生活排水、肥料、土砂、雨水→富栄養化
 - ・土砂、水→土壌形成、水の供給
 - ・工場等から出る化学物質→水質汚染
 - ・栄養→魚の成長、漁業の発展
 - ・植物の種子→外来種の生育範囲拡大
- 5 自分が住んでいる地域でできること、また自分でできることは何か
 - ・山林の管理、流木止め
 - ・農薬、肥料の適量利用、減量、(堆肥、緑肥の利用)
 - ・生物や自然環境のモニタリング
 - ・ゴミ捨て場を動物に荒らされないようにする
 - ・ごみ発生の抑制、不法投棄の取り締まり
 - ・発生源でのゴミ拾い
 - ・活動を広める、知らせる

4. アンケート結果

- ・漁師さんに魚の捌き方を教えてもらうなど、島民の方々と交流できたのがよかった。
- ・普段勉強していることが違う人たちの話を聞くのが楽しかった。
- ・海洋ゴミから派生して、近年の海が抱える問題について話すことができて有意義な時間になった。
- ・実際に清掃をした後にゴミ・環境問題について考え、意見交換をする場を設けることは大切だと思った。ゴミを拾って終わりではなく、どうやって自分ごとに落としていくか、どうすればもっとたくさんの人に伝えられるのかを考える機会となった。
- ・去年よりゴミの量が少し減っており、改善が見られてよかった。ただ、細かいプラスチックゴミはまだ多く残っていたので、これからも対策は必要だと感じた。
- ・学生交流会と海岸清掃がリンクしており、流域とのつながりが話し合いを通じて見えてくるのが楽しかった。